

イントロダクション

ヤン・フート

出展：“Over the Edges” Catalogue. Published by S.M.A.K., 2000

翻訳：ChatGPT

エクストラ・ムロス。

美術館が自らの堤防を越えて溢れ出すこと。都市と制度、内部と外部、公共と私的のあいだにある境界を可塑的なものにすること。過去数十年にわたり、美術館が立ち上げ、あるいは共同で組織してきた一時的なサイトスペシフィック・プロジェクトは、さまざまな仕方で特徴づけることができる。しかし、いかなる記述も必ず同じ出発点に立ち返る。それが、1986年に企画された館外展「Chambres d'Amis」である。この展覧会では、さまざまな国から招かれたアーティストたちが、ゲント市内の個人住宅に介入することを求められた。展覧会は都市全体を横断する巨大な探索のように展開し、有形・無形の痕跡を残した。それ以降、美術館は定期的に館外での企画を行ってきたが、多くの点において「Chambres d'Amis」はいまなお模範的存在であり、他の企画を測る基準となっている。

しかしそれは、この基本概念が変化や発展に開かれていないという意味ではない。その反証が「Over the Edges」である。本プロジェクトは、「Chambres d'Amis」の概念を継承しつつ拡張したものであるが、ひとつ大きな違いがある。かつての、過度に濃密で生々しい私的空間に代わり、居間や階段、台所といった空間が、それぞれ固有の場所として選ばれている。いま強調されているのは公共空間であり、都市全体に点在する 50 点以上のサイトスペシフィックな作品によって、新たな生命が注ぎ込まれている。

この新たなダイナミズムは、都市の街角——開かれた場所であり、同時に移行のゾーンでもある地点——から生まれている。街角は立ち止まる契機となり、私たちの歩みを止める。それらは明確に構造化された参照点であり、私たちが自らの位置を把握する手助けをしてくれる。美術館を一つ、あるいは複数擁する都市で展覧会を開催することは常に挑戦である。ましてや、すべての建物がそれ自体でモニュメント、あるいは一種の芸術作品である都市において、サイトスペシフィックなプロジェクトを実現することは二重の意味で困難である。本企画は、私的と公共、隠蔽と露呈、建築と都市開発の境界を曖昧にする。

だが、境界の探究以上に重要なのは、アーティストたちが都市における芸術の機能そのものを問い直す、そのほとんど実験的かつ体験的なプロセスである。ここで美術館は、作品を展示する制度および空間としての自己をも問いに付す。単なる展示室の集合体であることをやめ、思索の場となり、作品が新たな衝動を生み出す場所へと向かって旅立つ拠点となる。

実際、絵画やあらゆる芸術作品は、単なる物体ではなく、文脈と相互作用する能動的な主体でもある。美術館の壁の外に広がる生活とも関係を結ぶ存在だ。オランダの美術史家・作家カミーユ・ファン・ヴィンケルは、論考集『Moderne Legende』の序文において、美術館と公共空間はもはや明確に区別できる存在ではないと述べている。「美術館は、芸術が好むと好まざるとにかかわらず、公共圏の単なる頂点となってしまった」。私たちの見解はそこまで急進的ではない。私たちにとって美術館とは、多様な芸術的傾向が交差し、自己を肯定し、同時に自己を問い直す場である。

美術館は終着点ではない。急速に変化する社会のなかで、芸術の機能を問い続けるための手段なのである。「Over the Edges」は、美術館（作品を保存し公開する制度）と都市とのあいだに双方向の往復運動を生み出す点で、こうした考えと完全に調和している。ここでは「新しい」芸術と古い建築のあいだに対話が生まれ、美術館、都市の住民、そして日常生活とのあいだに新たな社会的ネットワークが形成される。

「Over the Edges」は、ある明確な目標の達成を目指す、整然と仕上げられたプロジェクトではない。それは、コミュニケーションと交換のプロセスとして理解されるべきものである。本プロジェクトは、開放性、直接性、即時性、そしてアクセス可能性を重視する。街を歩く通行人は、偶然出会う、あるいは意識的に訪れるそれぞれの作品に対して、自ら解釈や意味を与えることを促される。作品は孤立した存在として体験される必要はなく、都市環境とのより広い出会いのなかで共有される。

さらに、作品が都市全体に散在することで、これまで美術館を訪れることをためらっていた人々も、思いがけず都市の構造の中に組み込まれた作品と向き合うことになる。反応は、賛同から拒否までさまざまであろう。しかし重要なのは、人々が作品について語り、考えることである。その結果は必ず肯定的なものとなる。現代のかつ視覚的な主題に対する感受性が高まり、現代美術をめぐる議論が専門家だけのものではなくなるからだ。

もっとも、このような企画には危険が伴う。内容を欠いたまま、洗練され、壮観で、大衆的なショーへと堕してしまう危険である。このリスクを避けるには、公共性に訴えかけながらも、環境と真に応答する卓越した作品を提示できるアーティストを慎重に選ぶ必要がある。「Over the Edges」のために制作された作品群は、都市環境への統合と対比の境界線上で展開されている。都市に織り込まれながらも、自律性と固有の性格を保ち、立ち止まる効果を生み出す。見過ごされがちな都市の角や側面に注意を向けさせるのである。

芸術は単なる駆動装置——視線を導き、誘い、対峙させるもの——であるだけでなく、変化の速度を高め、ときに思考を研ぎ澄ますための一時的な停止をもたらす触媒でもある。

では、カール五世はなぜここに登場するのか。

この問いへの答えは多層的で、曖昧さを含んでいる。カール五世は出発点であると同時に、開かれた問いでもある。歴史的人物は、現代を照らし出す理由と可能性を与えてくれる。現在の都市は歴史都市の「痕跡」を帯びており、過去と現在は相互作用をやめることがない。私たちは歴史を再現するのではなく、相互的で変容的なアプローチを選んだ。情報や図像を一方的に送る祝祭ではなく、都市の住民とアーティスト、都市と作品、現在と過去の対話を促進する出来事として。

「Over the Edges」が、賛同から拒否、挑発から肯定的反応に至るまで、幅広い感情を喚起することを私たちは願っている。それはカール五世という人物が呼び起こす多様な感情と同じほど多様であるべきだ。本質的に「Over the Edges」は、美術館、都市、芸術が新たな可能性——抽象的であれ具体的であれ——を探るための出発点である。本プロジェクトの影響は、少数の恒久的介入に限定されるものではない。展覧会が終わった後も、その強度は確実に反響し続けるだろう。たとえその振動が不可視で、地中深くに潜むものであったとしても、その振幅は決して小さくない。